令和元年度　かほく市立七塚小学校　学校評価中間報告書

	重点目標	具体的取組	主担当	現　状		評価の観点	達成度判断基準	判定基準（A＋Bの割合で評価）	調査対象 調査時	達成度	判定	２学期に向けての改善策など
1	確かな学力の育成と外国語教育の充実	★① 国・算・英の3教科を校内研究の核とし，若手教員早期育成プログラム等，日常的なOJTで教師の授業力を向上させる。	指導研究（赤池） 指導力改善（北川） 若プロ担当（川崎）	・3教科を軸に深めの発問を研究していくことで，付けたい力がより明確になってきた。 ・家庭学習の定着については，昨年度は前期95%，後期92%とA評価ではあったが依然として個人差が大きい。 ・「まなびいず」を生かす等，楽しく学ぶ授業づくりを通して，主体的に学ぶ力を育成していかなければならない。 ・リーダーを中心にニーズに合った日常的なOJTを行い，着実に授業力向上を図っていかなくてはならない。	満足	S：学校での勉強は分かりやすい。	A：よくわかる B：だいたいわかる C：わからない時がある D：わからない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 7･12月	89% → 87%	B	分からない児童の何が分からないのかを把握する。研究の重点を意識し，七塚スタイルで児童と共に見通しをもった授業の実践を積み重ねる。
					満足	P：子どもは，授業が分かりやすいと言っている。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全保護者 7･12月	91% → 95%	A	児童一人一人を見取り，分かりやすい授業の改善に努める。学校研究の取組や児童が楽しく学び合っている姿を保護者に伝えていく。
					成果	S：学年に応じた家庭学習時間が定着している。	A：1週間の学年目標時間を達成した B：達成できなかった	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：72%未満	全児童 7･12月	84%	B	学期始めに、家庭学習強化週間を設け、時間の意識と計画的にすることの意識付けを図る。家庭学習の量を学年でそろえるようにする。
					成果	S･P：自分で計画を立てて勉強している。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 全保護者 7･12月	S：85% → 83% P：73% → 74%	B C	児童に家庭学習で計画を立てるということを意識的に指導する。強化週間だけでなく、日々の家庭学習から意識させて取り組むように指導していくことで、保護者の達成度も上がるようにしていく。
					努力	T：指導力向上のために積極的にアドバイス・指導をしている（受けている）。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	88%	C	メンターとなる教師を増やし，自己有用感を高める。対象とする教師を限定して小集団で実施したり，参加者が対話形式で自分のことを話す場面を設けたりするなど，自己開示を重視した実施形態となるよう工夫する。
		② 学力向上ロードマップを実働化させ，学力調査等検証をもとに授業改善を図る。	集計･分析（加納） 指導研究（赤池）	・学力向上総括部（4チームのリーダー）で，ロードマップの横の連携が図れるようになってきた。 ・学校研究をもとに，検証を生かした授業改善を組織的に進めていく必要がある。	努力	T：学力調査結果の分析を，各教科の単元構成やあっぷUPタイムに位置づけて学力向上に取り組んでいる。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	94% → 86%	C	教師のC評価は倍増したが、A評価は３倍増になった。クラス間格差をなくし学力向上に取り組めるよう、学年会や若プロを通して授業研究していく。
					努力	T：研究の重点である「考えたくなる課題」「考えを深めるための工夫」のある授業を構築しようとしている。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	100% → 94%	B	学年で教材研究を行い，課題提示の仕方やねらいに迫る深めの発問を共有する。取り組み後は，学年会シートで振り返り，授業改善につなげる。
		③ 外国語教育の全面実施を見据え，「話す･聞く･読む･書く」力を計画的に育成する。	外国語担当（諸江）	・学校全体としての共通した取組が十分ではなかった。英語アシスタントとも連携し，全教員が共通理解しながら，コミュニケーションの素地を養うような活動や指導を積極的に取り入れていく必要がある。	満足	S：外国語活動に楽しく参加している。	A：とても楽しい B：楽しい C：あまり楽しくない D：楽しくない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 7･12月	96% → 95%	A	引き続き子どもが楽しいと思える活動を積極的に取り入れていく。またＡＬＴと連携を取り，低学年の活動も楽しいものにしていく。
					努力	T：英語アシスタントと連携し，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を養う指導に主体的に努めている。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満 A：100%	全教員 7･12月	80% → 92%	B	指導方法について助実先生と連携を図り，積極的に打ち合わせで提案してもらったり，終礼で提案したりする。
2	いじめ・不登校や問題行動の未然防止と心の教育・特別支援教育の充実	★① 授業の中に生徒指導の3機能を生かし，一人一人の居場所づくりを保障する。	生徒指導（諸江）	・前年度後期96%の児童が「学校は楽しい」と感じていた。 ・100%の児童が「楽しい」と感じる学校づくりにしていくために，学校全体で生徒指導の3機能を理解し取り組めるように努めていく必要がある。	成果	S：毎日学校へいくのが楽しい。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全児童 7･12月	91% → 93%	B	子どもの普段の様子やアンケートから一人一人をしっかりと見取り，その都度声かけをするよう，終礼で伝えていく。
					成果	P：子どもは学校へ行くのが楽しいと言っている。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全保護者 7･12月	94% → 93%	B	楽しくないと答えた児童に対して，担任だけでなく，全教職員で声かけができるよう，終礼で報告等を行っていく。
		② QU調査やいじめアンケートを活用し，問題の早期発見・早期対応を心がける。	生徒指導（諸江）	・隔月，いじめアンケート・ハートチェック・個人面談を実施し，児童の思いを聞き取り，問題の早期発見・早期対応に努めている。 ・前年度いじめをいけないと思う児童の割合を増加させることができた。 ・昨年度いじめの事例を見逃してしまった。よりアンテナを高く張り，児童の様子を観察し，組織的に対応していくようにする必要がある。	成果	S：いじめはどんな理由があってもいけないと思う。また，いじめをしていない。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全児童 7･12月	99% → 99%	B	普段の生活で定期的に話題にしたり，アンケートの度にいじめどんなことがあってもいけないことを伝えていく。
					成果	P：学校のいじめの未然防止や早期発見の取組が伝わってくる。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全保護者 7･12月	90% → 94%	A	生徒指導便りやＨＰ，担任の口から取組について伝えてから配付などの工夫を継続的に行っていく。
					努力	T：いじめの未然防止や早期発見・早期解決に努め，敏速な対応をする。個人カードを活用した指導を継続する。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	76% → 100%	A	今後も定期的に個人カードの記入の機会を設定し，やりきるようにする。
					成果	S：Q－U調査からの実態把握 【学級満足群の割合】		A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	3～6年 5･10月	67% → 66%	D	１回目で点数が悪かった質問項目を把握し，その子に合ったためあてを設定する。そして，２回目までに達成できるよう支援していく。
		③ 児童を認める温かい働きかけを大切にし，児童の気持ちを受容しながら指導・支援する。	生徒指導（桝田）	・昨年度，不登校児童は2人であった。 ・児童理解の会やSCとの連携により，学級や個人の様子についての共通理解は概ね図られている。 ・前年度後期「自分にはよいところがある」と思っている児童は87%であった。 ・生徒指導の3機能を生かして授業を行い，自己肯定感や自己有用感を高める必要がある。	成果	S：自分にはよいところがある。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 7･12月	87% → 86%	B	一人一人の児童の特性を把握し，発揮される場面を的確に捉え，児童のよさを価値づけていく。
					努力	T：児童のよいところを見つけたり気づいたりできる指導をしている。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	94.1% → 71%	D	できないところばかりに目を向けるのではなく，がんばっているところやできたところを見つけ価値づける意識をもつ。
					努力	T：生徒指導の3機能を生かして授業を行っている。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	100% → 93%	B	どの場面で何をすることが生徒指導の３機能を生かすことなのかを具体的に示して全教職員で取り組む。
3	児童生徒の体力・運動能力の向上と食育の推進	① 県教委の「体力づくり1校1プラン」やスポチャレをもとに，全校で体力アップに取り組む。	体力づくり（清水）	・全校で取り組むよう働きかけたことで，スポチャレに取り組む児童の意識が昨年度98%に向上し，上位に入賞するクラスも増加した。 ・週に1回はスポチャレに取り組んでいく。	努力	S：「スポチャレいしかわ」に頑張って取り組んでいる。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全児童 7･12月	98% → 97%	A	取り組みの意識はもてているので、２学期以降も続けてほしい。体育館を使えない期間は運動場のスペースにシャトルボールができるように場を作る。
					成果	「スポチャレいしかわ」でのチャレンジ部門・ベスト部門の結果		A：20位以内8クラス以上 B：20位以内6クラス以上 C：20位以内4クラス以上 D：20位以内2クラス以下	全担当者 毎学期		A	１２クラス中１０クラスが２０位以内だった。２学期は投げる運動なので、引き続き取り組みをお願いします。
		② 自らの身体や命を大切にしながら健康や体力を増進する健康安全教育の充実を推し進める。	保健安全（岡田）	・訓練の際，火災や地震など状況に応じた行動を取れる児童が増えている。しかし，真剣みに欠ける児童もいる。 ・教師はマニュアルを基にした訓練に慣れてきたが，臨機応変に判断・指示する訓練はあまりできていない。	努力	T：避難訓練を通して，事故回避の安全な行動がとれるように指導している。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	100% → 100%	A	繰り返しの訓練で災害時の基本的な動きは習得できているが，個々の職員が全体的な動きを把握できるよう，訓練の実施形態を工夫する。初期消火など，行っていない訓練を取り入れていく。
					満足	S：自分の身を守るために考え，行動できるようになっている。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：100% B：80%以上100%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 避難訓練後	98% → 98%	B	避難の態勢や素早い集合ができるようになっているが，休み時間の訓練では真剣みに書ける児童も見られた。事前指導をきちんと行うことで，指示がなくても自分で考えて行動できる力を訓練していく。
		★③ 学校保健委員会を中心に家庭と連携を図りながら，基本的な生活習慣を培う。	保健安全（松田）	・「早寝早起き朝ご飯」に取り組んではいるが，生活習慣の改善が必要な児童は，どのクラスにも複数名いて改善が難しい。 ・昨年度PTA研修部を巻き込んだように，家庭への啓発を更に工夫し，家庭と連携した指導が必要である。	成果	S･P：毎日，朝ご飯を食べている。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全児童 全保護者 7･12月	S94%→ 95% P97% →96%	B	学級担任が保健指導を行えるよう、保健だよりなどの資料を用意したり、保健室来室時に朝食を含めた生活全般に関する個別保健指導をしたりしていく。
					成果	S：寝る時刻を守っている。	A：毎日守っている B：週6日守っている C：週5日守っている D：週4日以下守っている	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 毎学期	84%→ 75%	C	児童自身が睡眠の必要性を理解できるように、保健だよりなどを使って学級担任に保健指導をしてもらったり、体重測定時などに養護教諭が保健指導をしたりしていく。また、指導した内容を家庭に伝える。
4	新学習指導要領に対応した教育環境の整備	① 新学習指導要領を「学びの地図」と位置づけ，教科横断的な視点で教育課程の実施を図る。	教務主任（加納） 指導研究（赤池）	・週案をもとに学年で教育課程の管理や調整ができるようになってきた。 ・年間指導計画をもとに教科での学びを全教育課程につなげていく教員のカリキュラムマネジメント力の向上が必要である。	努力	T：教育課程の実施内容・進度・時数の管理や調整を適切に行っている。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全職員 7･12月	100% → 94%	B	毎月末の時数集計をもとに教務から不足分について声をかけ、教育課程が適切に実施できるよう支援していく。
					成果	T：教科横断的な視点で教育活動を位置づけることができた。	A：学期に3回以上 B：学期に2回 C：学期に1回 D：取り組むことができなかった	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全職員 7･12月	81% → 93%	A	年間指導計画の学年一覧表に、教科横断的なつながりを明示するようにしたことで，Ａ評価は激増し、Ｃ評価も激減した。今後も蓄積・修正していく。
		★② 地域の人・物・事の教育資源を積極的に開発し，ICTを活用して教育活動を深化充実させる。	CS事業担当（加納） 情報教育（土田）	・教科や総合的な学習の時間の中で，地域人材による授業や体験活動を各学年が工夫し行うことができてきた。 ・地域のよさを感じ，大切にしていきたいという思いは育ちつつあるが，他者と関わり合う力が弱い児童がいる。 ・ICT活用については教員の力量差が大きいため，本年度も若プロで研修を行い，ICTの活用力を向上させる。	満足	S：学校の先生以外の人（ゲストティチャー）と勉強するのはためになる。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 7･12月	96% → 98%	A	Ａ評価がさらに上昇しているし、Ｒ1県基礎学力調査でも高かった。本校の強みであり、この学ぶ意欲を維持していく。
					成果	T：地域人材を活用した授業や体験活動を行っている。	A：学期に3回以上 B：学期に2回 C：学期に1回 D：取り組むことができなかった	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 7･12月	88% → 80%	C	Ａ評価は微増したが、C+D評価が7%以上増加した。ＧＴを活用した授業を教育課程に沿って計画的に進めていけるように，週案を毎週チェックしていく。
					努力	T：ICTを活用した授業を行っている。	A：よく取り組んでいる B：取り組んでいる C：あまり取り組んでいない D：取り組んでいない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全教員 7･12月	81.3% → 82%	B	それほど変化していないが，Dと回答した苦手な教員がいる。ICT機器を使うことで，教材準備の時間短縮にもなるので，今後も効果的に使用できるように苦手な教員に対してミニ研修などを行っていく。
		③ コミュニティスクール事業を効果的に活用し，社会に開かれた学校づくりに努める。	教務主任（加納）	・コミュニティ・スクール事業が4年目を迎え，学校でも地域でも取組が浸透してきた。 ・将来の夢や目標を持っている児童は91%と増えてきている。 ・地域のよさを学んだり誇りを持ったりしながら自分の夢や目標に繋がる学習活動を積極的行い，HP等で啓発することで，保護者・地域の協力を更に活用していく。	満足	S･P：将来の夢や目標を持っている。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全児童 7･12月	S：88% → 89% P：82% → 84%	B	学校行事や校外学習・異学年交流だけでなく，普段の授業においても見通しやふり返りの場面で、本時の学びが将来とどうつながっていくのか児童が自覚できるように工夫していく。
					成果	T：学校での取組の様子をより多くの方に知ってもらうために定期的にHPを更新している。	A：月2回以上 B：月1回以上 C：学期に1回以上 D：取り組んでいない	A：100% B：90%以上100%未満 C：80%以上90%未満 D：80%未満	全教員 毎学期	94% → 50%	D	前回より教師のＢ評価が激減した。学級便りでは広報しているがＨＰの更新はしていないと考えたからだと思われる。次の検証では、学級だより等も含めて評価する。
					成果	P：学校は便りやHP等で学校の指導方針や子ども達の様子などをわかりやすく伝えている。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全保護者 7･12月	95% → 96%	A	HPの閲覧数が増えていることからも，取組の成果がうかがえる。継続していく。
5	教職員の働き方改革の推進	① 会議や行事の精選・効率化を図り，子どもと向き合い，教材研究する時間を確保する。	教務主任（加納）	・今学期は，会議の時間を1時間以内に終了できるよう効率化を図っていく。	努力	T：会議の効率化を図り，子どもと向き合い教材研究する時間を確保している。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全教員 7･12月	47% → 76%	C	Ａ評価が倍増し、Ａ＋Ｂ評価も30%上昇した。提案者による事前の準備に裏打ちされた簡潔な提案のお陰だと思われる。今後も続けて、勤務時間内に会議が終了するようにしていく。
		② 教師の意識改革を図るとともに，PTAやおやじの会等，外部とも連携していく。	CS事業担当（加納）	・学校CNを活用したり取組をスリム化したりできるようになってきた。 ・活動が前例踏襲にならないよう教員の意識改革がさらに必要である。	努力	T：授業や取組の無理と無駄を省いていくように努力している。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満	全教員 7･12月	87% → 100%	A	Ａ・Ｂ評価ともに上昇し、Ｃ評価がなくなった。家庭訪問や校区巡視等の行事精選が進んだことが原因だと思われる。今後も教育効果の少ないものは精選していく。
		★③ 学校評価の重点として項目を設け，継続的に評価・改善を行う。	教頭（榎）	・職員一人当たりの時間外勤務の平均は47.25時間であった。80時間越えの職員も月平均4.4人と全体の1/4程である。	成果	T：一人あたりの勤務時間月平均（昨年度の同時期と比較）の10%減を目指す。	A：10%減 B：5%減 C：昨年度と同様 D：昨年度より増加	A：10%減 B：5%減 C：昨年度と同様 D：昨年度より増加	時間外勤務調査 7･12月	50時間 → 54時間	D	2学期は、校務分掌の平準化を意識して業務の割り振りを行うとともに、日番の見直しや各校務分掌の提案内容に対して、スクラップ&ビルドの視点から助言を行う。
				・昨年度，市教委資料配付やPTAへの啓発を重ねることで，保護者には浸透しつつある。学校評価に位置づけることで，保護者への意識づけを更に高めていく。	努力	P：県や市の方針を理解し，教職員の本務である児童の教育に向き合う時間を確保できるように協力している。	A：よくあてはまる B：だいたいあてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	A：80%以上 B：70%以上80%未満 C：60%以上70%未満 D：60%未満	全教員 全保護者 7･12月	85% → 87%	A	学校や市から配付されたお便りやPTA役員会等を通して保護者の理解や協力は進んできている。今後も継続して周知していくとともに、PTAとの協力や役割分担の内容を明記し、次年度に繋げていく。

赤池

赤池

北川

北川

川崎

加納

赤池

諸江

諸江

諸江

諸江

諸江

諸江

諸江

諸江

桝田

桝田

桝田

清水

清水

岡田

岡田

松田

松田

加納

加納

加納

加納

土田

加納

加納

加納

加納

加納

榎

榎